

1. はじめに

2003年に制度化された個別支援計画の意図は、本人のニーズから求められる姿を明らかにし、様々なサービスを受けながらも実現するための計画書となっています。

本人理解<サービス提供 の意味合いが強いと感じる。(本人のニーズ<家族のニーズは言い過ぎか)

びわこ学園では「重い障害があり自己表現が困難な利用者の行動(表情・筋緊張・脈拍など)から、**本人自身の意図やその意味を理解**することが求められます。そのことから、本人がどのように外界の情報を受け止め処理し、外界に働きかけようとしているかを知ることで**本人が外界に主体的にかかわるための適切な支援が可能**になる」とされています。

つまり**本人のニーズを明らかにするための働きかけを繰り返し行う**ことが求められます。

2. 根拠の確認

「発達」とは、外界からの情報を取り入れ、自ら外界に働きかける外界交流活動(運動・認知・認識)の枠組み、および活動の主体である自我、人格の育ちを示します。利用者の発達の理解には、利用者を定型発達の評価軸で評価することはではありません。(障害があるが故のしんどさを理解し、適切な支援を行うことが求められます。)

重い障害があり自己表現が困難な利用者の行動から、本人自身の意図やその意味を理解することになります。本人がどのように外界の情報を受け止め処理し、外界に働きかけようとしているかを知ることで**本人が外界に主体的にかかわるための適切な支援が可能**になります。

理解と援助のための発達の視点は、「できる」「できない」というこの能力の視点からとらえるのではなく、利用者と支援者の間で意味世界を共有し了解関係の形成を目指すことにあります。(参照:個別支援計画・基本情報シートのイメージ図)

3. アセスメントの根拠 (参照:利用者の姿・行動をとらえる視点と項目)

以上のように、アセスメントにつながる本人理解がおざなりになると、利用者不在の個別支援計画書になってしまう可能性があります。まずは基本情報を明らかにし、まだ明らかになっていないものに対して取り組むことが個別支援計画となります。

最後に

障害を持つ方の支援とは、「今ここで(の困りごと)への支援」だけでなく、これまでの「語るべき過去」ととらえ、これからの人生が楽しく暮らすことができるように支援方法を本人と一緒に作り上げることが求められることは言うまでもありません。

以上